学 位 論 文 審 査 の 要 旨

学位申請者	渡邊　佐恵子 比較社会文化学専攻2012年度生		論文題目	幼児の音楽行動から構築される「音楽の場」 ―「歌い手」と「聴き手」の相互のかかわりを中心に―
審査委員	主　　査:	永原　恵三　　教　授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否　：　否
	副　　査:	井上登喜子　　准教授		「否」の場合の理由
	副　　査:	中村美奈子　　准教授		□ ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	福本　まあや　　助　教		□ イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	猶原　和子　　教　授 （江戸川大学）		■ ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博　士	（人文科学）		■ エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
（英語名）	(Ph. D. in Musicology)			□ オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学 位 論 文 審 査 ・ 内 容 の 要 旨

この論文は、幼児の音楽行動を「歌い手」と「聴き手」の相互のかかわりという視点から捉え、そこから生成された「音楽の場」の構築過程について、明らかにすることを目的としている。子どもたちの音楽行動からは多様な「音楽の場」が形成されると考えられるが、この研究では、歌を媒介とした子どもたち同士のかかわりについて検討している。さらに、本研究の特徴は「歌い手」の子どもたちだけではなく「聴き手」の子どもたちの音楽行動にも焦点をあてて、「歌い手」と「聴き手」相互のかかわりを考察している。また、この研究は保育学の論文ではなく、民族音楽学の論文として提出されている。つまり、子どもたちの音楽行動を、たとえば数値化して、発達の度合いに応じて変化することを立証するのではなく、むしろ、子どもが生活する文脈に則したかたちで、子どもたち一人ひとりが音楽行動によってどのような人間の関係性を生み出し、それを運用していくか、という民族音楽学の課題に取組んだものである。　1）論文の内容：①調査の方法はAこども園を調査協力園として、その2歳児10名と3歳児11名に調査協力を依頼した。調査期間は2回に分けて約3ヶ月ずつであった。申請者はボランティア、保育補佐員などの勤務をしながら、、勤務のない日に観察を実施した。Aこども園の保育は、子どもたち一人ひとりの意志を尊重し、子どもたちがやりたい遊びを、保育者は見守り、共にその遊びに関わる。音楽行動については、皆で集まって一斉に歌う時間もあるが、むしろ、自由な遊びの時間に、子どもたちも保育者もそれぞれで歌う環境にあることが、特徴として捉えられる。②研究方法として、生野里花による2015年の博論等を参考にして、「音楽を介して時間と場を共にする」人と人との様相を見てゆく点での視点の共有をしている。　②論文内での用語として、「歌い手」と「聴き手」で、とくに「聴き手」については歌は歌っていないが、身体的動作や様子から「歌い手」と関わっており、その歌を聴いていると考えられる子ども、と規定する。また「音楽的共振」もキーワードであり、「歌の拍を子どもたちが共有することに焦点を当て、その拍を共有することで現われる身体的動作の一致とし、さらに「相手の歌っている歌を聴くことで、拍を知覚して共有し、そこから、手を叩いたり，身体を揺らしたりといった身体的動作に繋がった場合もまた「音楽的共振」としている。この概念規定において、拍を媒介とした子どもたちの「音楽的共振」は以下の事例において、重要な要素である。

③3件の事例について、子どもたちの行動を分析、考察し、「音楽的共振」という拍を共有することで現われる身体の動きの一致があり、「歌い手」と「聴き手」の関わり合いにおいて見られること、そしてそれぞれの子どもたちが互いに影響しながら「音楽の場」が構築されたことが明らかとなった。

④結論：「音楽の場」は、「歌い手」と「聴き手」の子どもたちの音楽行動が相互に交わりながら生まれた「場」であり、一人ひとりの子どもが「共にいる」存在と認識することで構築されることが明らかになった、としている。

⑤審査の内容：審査委員会は12月24日と2月9日に開催された。第1回では記述方法の厳密さが求められ、第2回ではよりわかりやすくするための図解による場の状況説明が求められ、適切に修正した。公開発表は2月18日にオンラインで開催され、多数の出席者に恵まれた。また、発表の仕方や質疑応答も大変明解であった。公開発表後に最終審査を行ない、審査委員全員一致で、本論文を合格とすること、また、本論文が本学における学位（人文科学）、Ph. D. in Musicologyに相応しい非常に優れた研究であると判断した。